

# A Study on the Formation of Interactive Reading Conception as a Facilitator to Interactive Reading Performance

（相互作用的な読解活動を促す

相互作用のリーディング・コンセプションの形成に関する研究）

## 学位論文内容の要旨

第二言語の先行研究では、熟達していない第二言語の読解過程は熟達した第一および第二言語の読解過程と異なり、相互作用的ではないとする主張が支配的である。本研究の目的は、熟達していない外国語の読解において、読解過程を相互作用的であると見なす意識が相互作用的な読解活動を促進するか否かについて検証することである。本研究において、相互作用のリーディング・コンセプションとは読解過程を相互作用的であると見なす意識を指し、相互作用的な読解活動とはボトムアップおよびトップダウン方略使用の有意な組み合わせにより定義される。また、本研究は相互作用の読解過程の理論的根拠となるスキーマ理論、および読解方略使用の知覚により内的読解過程を捉えることの妥当性を前提条件としている。

本研究は比較的長期にわたる教育的実験の形態で行われ、第1研究および第2研究で構成された。第1研究では意味、構造、スキーマに基づく基礎的方略の指導が、熟達していない外国語の読解において相互作用のリーディング・コンセプションを形成し、かつ読解力を向上させるかについて検証した。これらの基礎的方略の指導は、熟達していない外国語の読み手から、テキスト内容と内容スキーマ間の相互作用およびテキスト構造と形式スキーマ間の相互作用を引き出すことを狙いとした。第2研究では、熟達していない外国語の読解における相互作用のリーディング・コンセプションの形成が、より包括的な方略使用および相互作用的な読解活動を促進するかについて検証した。日本の高校生約500名が全体の実験参加者で、その約半数が第1研究において実験群と統制群を構成し、第2研究では第1研究参加者が実験群、残りの参加者が統制群を構成した。なお、第1研究における統制群に対しても、倫理上の理由から基礎的方略の指導を実験の中間段階から実施した。

第1研究における相互作用のリーディング・コンセプションの形成については、基礎的方略使用の量的差異、基礎的方略の範囲内での相互作用の読解活動の促進、読解力向上度の自己評価およびその理由、基礎的方略使用と読解力向上度の自己評価との関係によって総合的に評価した。まず基礎的方略使用の量的差異に関して、実験群と統制群間で明確な有意差が見られ、さらにその有意差は統制群にも基礎的方略の指導を行った後にほぼ消失した。次に基礎的方略の範囲内での相互作用の読解活動の促進に関して、実験群および基礎的方略の指導を行った後の統制群においては、ボトムアップおよびトップダウン処理と見なされる2因子が抽出された。これに対して初期の統制群においては、同条

件で因子に分解することができなかった。第3の読解力向上度の自己評価およびその理由に関して、90パーセント近くの参加者が基礎的方略の指導によって自己の読解力が向上したと評価し、かつその理由は相互作用読解活動の特徴を顕著に示した。最後に、基礎的方略使用と読解力向上度の自己評価との間には、緩やかな相関および因果関係が見られた。これらの結果から、意味、構造、スキーマに基づく基礎的方略の指導は熟達していない外国語の読解において、相互作用読解・コンセプションを形成するという結論に達した。

第1研究における読解力の向上については、実際の読解力の量的差異、基礎的方略使用および読解力向上度の自己評価と実際の読解力との関係により評価した。まず実際の読解力の量的差異に関して、実験群と統制群間で明確な有意差が見られ、さらにその有意差は統制群にも基礎的方略の指導を行った後に消失した。さらに三者間には、緩やかな相関および因果関係が見られた。これらの結果から、基礎的方略の指導は熟達していない外国語の読解力を向上させるという結論に達した。

第2研究における包括的な方略使用の促進については、全体として相互作用読解・コンセプションが形成された実験群と形成されたとは見なされない統制群間で、各方略使用の量的差異を比較した。結果として、全てのボトムアップおよびトップダウン方略使用において、両群間で明確な有意差が見られた。これにより、相互作用読解・コンセプションの形成は、熟達していない外国語の読解において包括的な方略使用を促進することがわかった。

第2研究における相互作用読解活動の促進については、両群の各方略使用量と方略使用全体の関係性を第一言語と比較した。まず各方略使用量に関しては、第一言語の方略使用量の大半は統制群の方略使用量を有意に上回ったのに対して、実験群の方略使用量の約半数は第一言語と比べて有意差はなく、かつ残りの半数は第一言語の方略使用量を有意に上回った。つまり各方略使用量の面で、実験群の読解活動は統制群の読解活動よりも第一言語の読解活動に近い結果となった。次に方略使用全体の関係性については、解釈が非常に難しい結果となった。しかし総合的な判断において、実験群の方略使用全体の関係性は、統制群の関係性よりも第一言語の関係性に近い傾向が見られた。第一言語と実験群の読解活動におけるこれらの類似性は、相互作用読解・コンセプションの形成が、熟達していない外国語の相互作用読解活動を促進するのに重要であることを示している。

相互作用読解活動を促す相互作用読解・コンセプションの形成という視座は、第二言語の読解研究の領域では斬新である。本研究の結果は、相互作用読解・コンセプションと相互作用読解活動の間には重要な関係があることを示し、また言語的熟達度よりも読解過程についての読み手の意識が相互作用読解活動にとって重要であることを示唆している。ただし、方略使用全体の関係性については記述統計的傾向にとどまったので、今後の研究に課題を残すことになる。

最後に第二言語の読解教育に関しては、テキスト解読に偏向する第二言語の読み手に対して、相互作用読解・コンセプションの形成により熟達度を高める指導の効果が期待できる。また、相互作用読解・コンセプションの形成によって自発的な方略使用が見られたので、第二言語の読解指導においては、先行研究に現れる全ての読解方略を網羅的に教える必要はないことになる。

# 学位論文審査の要旨

主 査 助 教 授 河 合 靖

副 査 教 授 西 堀 ゆ り

副 査 助 教 授 鈴 木 志 の ぶ

学 位 論 文 題 名

## A Study on the Formation of Interactive Reading Conception as a Facilitator to Interactive Reading Performance

(相互作用的な読解活動を促す

相互作用のリーディング・コンセプションの形成に関する研究)

本論文は、英語読解授業で熟達度の低い英語学習者に基礎的読解方略を指導することにより読解力の向上が見られ、その読解力の向上が相互作用読解概念の形成によりもたらされたことを論述している。本論文では、読解にはテキストの部分的処理から意味を構築するボトムアップ処理と、読み手の既存知識に基づく予測と検証の過程で意味を構築するトップダウン処理があり、相互作用的な読解活動とはボトムアップ及びトップダウンの読解方略をうまく組み合わせながら読み進める行為と見なされている。低熟達度の第二言語学習者による読解において、教育介入により相互作用的な読解活動が可能となるか否かが本論文の中心課題である。論文の内容に即して、研究の具体的評価を論述する。

第一に、研究テーマの的確性、すなわち、本論文が固有の研究領域を有し、テーマが学術研究として意義を持つかを評価した。本論文の研究背景の章において、第二言語話者の読解が相互作用的であるか否かに関する二つの見解が、それを支持する研究とともにわかりやすく説明され、教育介入により低熟達度の英語学習者が相互作用読解を行なう可能性を調べることの学術的意義が明瞭に論述されている。本論文は、第二言語での読解研究で論争されてきた、低熟達度の第二言語学習者における相互作用読解というテーマについて、実験授業から得られたデータを通してその可能性を示唆する実証的研究である。特に、教育介入としての基礎的読解方略指導が、学習者の第二言語による読解観に変化を与え、それにより相互作用読解を可能にするという発想は今までにないものであり、この分野の研究の新展開を先駆けるものであると判断する。

第二に、研究の方法論に関する論述を評価した。本研究では、基礎的読解方略を指導する教育介入を行った実験群と、それを行なわない統制群の両方で、数値化されたデータを収集し、統計分析を通して、低熟達度の第二言語学習者が相互作用読解を行なうようになるか否かを考察した量的研究である。内容理解テストの得点の変化、読解方略使用の質問紙調査、読解に関する意識の質問紙調査の三つを主なデータ収集手段としている。内省的回答に基づく質問紙調査の限界が論述され、いくつかの前提の枠内で結果を解釈すべき旨が記述されている。当該分野が求める研究方法の記述の詳細さ

は十分に満たしていると判断する。

第三に、結果の解釈に対する妥当性を評価した。本論文では、得られた読解力の向上を、相互作用的読解概念の発達により読解が相互作用的になったためと解釈している。解釈の妥当性を判断する論点は、相互作用的読解概念発達の証左が見られるか、読解が相互作用的になった証左が見られるかの2点である。前者については、相互作用的読解概念の定義がややわかりにくい、下位概念の一つである読解力向上度の自己評価及びその理由は、学習者の読解向上に関するビリーフであり、相互作用的読解概念の発達に密接に関っている。実験群において、90%近くの参加者が基礎的方略の指導で読解力が向上したと評価し、読解向上の理由が相互作用的読解活動の特徴を顕著に示したことは、この学習者集団が相互作用的読解概念を形成したことを示す証左と言えよう。従って、相互作用的読解概念の発達はあったと解釈することが自然であると判断する。

後者の相互作用的読解の発達については、その根拠に、因子間の相関の増加をあげている。審査員のこの点についての質問に対する、松本氏の見解は次の通りである。方略を効果的に使いながら読解を進める学習者集団は、方略の共起関係が明瞭になって因子間の相関も強まるはずである。事実、母語での読解の方が、教育介入以前の第二言語での読解よりも因子間の相関が強い。因子間の相関の総体的な強弱が、その学習者集団の相互作用的読解のレベルを表わす指標となりうるはずだと彼は説明する。妥当性を検証する後続の研究は当然待たれるが、理論としては受け入れてよいと思われる。この指標とあわせて、因子構造における類似性も含めて判定した本論文の解釈は、この研究で得られたデータの範囲内で妥当性を有していると判断する。

以上により、研究テーマ、方法論、結果の解釈において博士論文として求められる水準は十分に満たしていると判断する。また、熟達度の低い英語学習者に対する読解指導への本研究の多大な貢献が期待される。

よって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。